

令和元年6月11日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03046

研究課題名（和文）有末機関の研究 - 有末精三新史料から見る占領初期のGHQと日本陸軍 -

研究課題名（英文）Research on ARISUE KIKAN

研究代表者

河島 真（KAWASHIMA, Makoto）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：00314451

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：敗戦当時、参謀本部第二部長であった陸軍中将有末精三は、陸海軍の指示により進駐するアメリカ軍との連絡・調整を担う通称「有末機関」を結成し、マッカーサー率いる進駐と大本営との間に立ってさまざまな活動を行った。その実態は、本人の回想などを除いてほとんど知られることはなかった。また、国立国会図書館憲政資料室に所蔵される「有末精三関係文書」には、当該時期の日記が欠落している。そうした中で、1945年8月末から10月にかけて、有末自身が記録した史料『横浜機関書類』『備忘録』の全部を筆耕し、有末機関が取り組んだ課題を明らかにし、解説を付した報告書を作成することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
陸軍中将有末精三が、通称「有末機関」を率いて、敗戦直後に日本の軍部と進駐するアメリカ軍との間の連絡・調整を行っていたことは知られているが、その実態を知る手がかりとなる一次史料はこれまで未発見であった。本研究では、ちょうどその時期に有末自身が記録した二点の一次史料を翻刻し、解説を付した報告書（371頁）を作成した。これにより、有末機関が取り組んだ課題を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：After World War II, ARISUE Seizou, Army Lieutenant General, was responsible for negotiating with the US Army in leading ARISUE KIKAN. I found two documents recorded by him about negotiations with it, and analysed its. We can know the reality of occupation through it, what was the problem for Japan or for the US Army? I made a report including all the sources and research result.

研究分野：日本近現代史

キーワード：有末機関 有末精三 敗戦 陸軍

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

通称「有末機関」を率いて、敗戦直後にアメリカ軍との交渉を担った陸軍中将有末精三については、その存在や役割は知られていても、有末機関としての活動の実態は、本人による回想（『終戦秘史 有末機関長の手記』芙蓉書房出版、1987年）以外にほとんど知られていなかった。国立国会図書館・憲政資料室所蔵の「有末精三関係文書」にも、戦前・戦中及び1950年代以降の日記などの記録は収められているが、肝心の有末機関長として活動していた時代のものは含まれていない。

そうした時に、末精三と縁戚関係にあるという兵庫県内のある旧家から、有末精三本人が記録した史料が2冊発見された。このうち『横浜機関書類』は、有末が厚木飛行場でマッカーサーの到着を準備する任を解かれ、アメリカ軍の拠点が最初に置かれた横浜へ移動するよう指示を受けた1945年8月下旬の辞令から、アメリカ軍が横浜から東京へ移動する9月中旬までの記録が、またもうひとつの『備忘録』には、同年9月4日から同月下旬までの記録が収められていた。まさに有末が、有末機関長としての活動を開始した時期と重なる一次史料である。

この貴重な一次史料を何とか読み解き、敗戦直後の陸軍の動向が明らかにできないかと考えたのが、研究の背景である。

2. 研究の目的

敗戦後の政治史については、占領政策研究や東京裁判研究などの分野で飛躍的に研究が進んだ。しかし、戦時中は軍事上の作戦指揮のみならず、日本の戦争指導全般において主導的役割を担った軍部、特に陸軍がいかにして敗戦・占領という事態を受け入れたのか、またそれに対していかなる対応をとったのか（迫られたのか）については、十分に研究が進んできているとは言えなかった。政府にとっての課題は必ずしも陸軍にとっての課題ではなかったはずであるし、また仮にそうであったとしても、問題の意味が両者にとって異なることや、問題の比重が一方にとっては軽く、一方にとっては重いこともあり得るはずである。

そこで、本研究では、この史料をまず利用可能な状態に持って行き、敗戦直後の陸軍について考えるきっかけとすることを、研究上の課題と位置づけた。但し、有末の文字は非常に癖があって読みにくく、しかも本人が理解できていればよいという立場で書かれているメモなので、記述が断片的で専門用語も多く、第三者が見ても理解困難な箇所が非常に多い。そこで、まずは文字をなるべく正確に筆耕することを課題とした。

その上で、関係史料をなるべく収集、調査し、史料を内容とその概要を記した報告書を作成することを最終的な目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 『横浜機関書類』と『備忘録』については、学生・大学院生と定期的な研究会を開催し、ひとつひとつ文字の確認を行った。後半で読めるようになった文字が前半に頻出している場合もあるので、全部で3回の読み直しを行った。
- (2) ウェブサイト「アジア歴史資料センター」から必要な同時代史料の抽出を行い、また国立国会図書館憲政資料室（有末精三関係文書）、防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室においても実地調査を行って関係史料の収集に努めた。
- (3) 占領史研究の泰斗である獨協大学法学部福永文夫教授をはじめ関係する研究者に助言を仰ぎ、史料の紹介・提供等を受けた。
- (4) 『横浜機関書類』『備忘録』の元の所蔵者から、有末精三との関係、史料の提供を受けた経緯、また有末精三という人物についてなど、聞き取りを行った。
- (5) 中間報告として研究期間（計3年）の2年目に「『有末機関』についての覚書」（『神戸大学文学部紀要』45号、2018年）をまとめた。
- (6) 史料の写真と筆耕データとを対照させ、解説を付した全371頁の報告書を作成した。

4. 研究成果

- (1) 有末精三の自筆史料『横浜機関書類』『備忘録』の全部を筆耕し、原本の写真と対照させ、解説を付した報告書（A4版・371頁）を作成した。（一例を下に掲げた）。
- (2) 研究成果の一部を「『有末機関』についての覚書」（『神戸大学文学部紀要』45号、2018年3月）にまとめて発表した。
- (3) 有末機関がアメリカ軍との間で交渉・協議を行った主要な課題、また有末機関自身が対応を迫られた主な課題は、数万人規模の進駐軍の宿営や食糧（いわゆる「給養」）の手配、アメリカ軍が引き起こす犯罪（不法行為）への対応、武装解除要求への対応、特に軍刀廃止を求める進駐軍との交渉（文化的価値のアピール）、連合国軍捕虜の調査と解放の準備・手続、海外に駐留する日本軍との連絡（連絡方法についての進駐軍への許可要請）、復員の手続と復員兵の福利厚生、武器の廃棄、戦時中の日本軍の作戦についての情報提供、などであったことが明らかとなった。特に、については、細菌戦・化学戦関係（「細菌戦、化学戦、主任者ヲ出セ」）、風船爆弾関係（「ふ号ノ責任者」）、暗号関係（「暗号組立作成関係者」「作戦開始以来ノ暗号書及関係アル暗号書類」）にアメリカ軍の関心があり、それに対してどのような情報提供を行うか慎重に協議されていた様子がわかった。

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

報告書『科学研究費補助金・基盤研究C(研究課題・領域番号 16K03046 二〇一六～二〇一八年度)有末機関の研究 有末精三新史料から見る占領初期のGHQと日本陸軍 河島真』
(2019年3月、全371頁)

6. 研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。